

名古屋市立名古屋商業高等学校

商品開発研究班

葦から"ZOO" Beyond

葦の持つ水質浄化作用や生物多様性維持機能に着目し、葦由来の新製品を5種類誕生させた。同時にワークショップやアニメーションの作成による啓発を通して、海外にも波及するような情報を発信。土産物としての葦製品定着を目指す。



愛知県立佐屋高等学校

羽ばたけコールドック農法研修班

「世界最小のアヒル(コールドック)が地球を救う!

世界最小のアヒル(コールドック)を活用した無農薬農法により生産された米を商品化した。さらに今年度はその米糠を使用した保湿クリームやボディソープを、地元のコンビニエンスストアで店頭販売できた。今後は、米だけでなく他の農産物でも6次産業化に注力していく。



愛知県立木曽川高等学校

総合実務部

国の天然記念物「イタセンバラ」を地域の宝に! ~広報活動と保護活動~

天然記念物の淡水魚「イタセンバラ」の保護を目的とした広報、保全活動を行う。今年度は新たな広報ツールとして、小学生を対象とした「イタセンバラかるた」を制作。イタセンバラの知名度も着実に向上した。



日本福祉大学附属高等学校

MANGROVE

Seedlings with our hope for children ~苗木という希望~

フィリピンにおいて、温室効果ガスの吸収や多様な生態系のゆりかごとして重要なマングローブの植樹を行う。計1,500本の植樹を行うとともに、現地の同年代学生と地球環境についての課題を共有し、意見交換を行った。



近畿

19 団体



近畿地区は、
「全国ユース環境活動発表大会応募高校」、
「近畿地区 高校生SDGsセミナー参加高校」の環境活動をご紹介しています。

(協力: NPO法人いけだエコスタッフ)

滋賀県立八日市南高等学校

花緑デザイン科 ランドスケープデザイン班

猪子山 ~異年齢交流による里山保全活動の11年~

猪子山を舞台に街づくりや小学生向け環境学習のコーディネートなどに取り組む。環境教育をベースとした実践的な地域貢献活動を通して、持続可能な社会の実現に向けて主体的に行動できる人材の育成を目指している。



京都府立木津高等学校

園芸部

地域環境を見つめ続けたい

地元河川の水質調査や里山再生活動、サギソウの復活作戦、駅前クリーン活動などローカルに徹した取り組みを続け、地域の環境を見守っている。農業分野では国際的な規範であるGlobal.G.A.Pの認証取得にも挑戦している。



京都府立桂高等学校

TAFS 地球を守る新技術の開発研究班

下水から回収した有用資源MAP ~持続可能な食糧生産実現のための切り札!~

震災復興プロジェクトとして、下水汚泥から回収されるMAPという物質を活用する研究を行っている。この技術によって、食料生産性を落とさずに土壌劣化の進行を抑えることができ、持続可能な農地の創出が期待される。



関西創価高等学校

ISS EarthKAMプロジェクトチーム

SDGsなどについて学ぶ

NASAの教育プログラム『EarthKAM』を利用して国際宇宙ステーションから写真を撮影し、地球環境の変化を中学生が監視できるデータベースの構築を目指している。また子どもたちに関心を高めてもらうため、写真を活用した『環境クイズラリー』を、オープンキャンパスなどの機会に開催している。

関西学院千里国際中等部・高等部

Neo イソギン

イソギンチャクと褐虫藻を研究し、スーパー褐虫藻を見つけ、サンゴの白化減少を止めよう

サンゴの白化現象を止める解決策を探るため、サンゴと共生関係を結び褐虫藻に着目した。二つの仮説を立て、イソギンチャクを用いた実験を通して高温条件に強い褐虫藻や再共生の能力について研究を行っている。



大阪府立園芸高等学校

ビオトープ部

トラップ法を用いたカシノナガキクイムシの防除に関する研究と活動

里山林を枯死させるカシノナガキクイムシを、他の生物は捕獲しない形で効果的に防除する方法を研究した。その結果、ペットボトルトラップや不織布トラップで成果をあげることができ、各種の学会・発表会で情報発信した。



清風高等学校

生物部 ヘドロ研究班

栽培研究におけるヘドロの効果

絶滅危惧種ニッポンバラタナゴの保護池に堆積したヘドロの活用方法を探るべく、小麦を用いた栽培実験を実施。有機肥料として使用でき環境保全につながると分かった。ヘドロを肥料に伝統品の綿を育てるなど地域に貢献したい。



清風高等学校

生物部 里山研究会

大阪府八尾市高安地域における地表性昆虫の環境指標としての可能性

里山における持続可能な暮らしを再現する環境保全活動を実践している。絶滅危惧種ニッポンバラタナゴの保護では年に1度の「ドビ流し」(池の掃除)で、2016年には約3万尾まで自然再生することができた。また、昆虫調査や森林整備にも力を入れている。環境教育や普及啓発にも取り組み、里山における持続可能な社会の実現を図っている。